『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会） 第16巻 第1号 2013年8月 1頁～13頁

ノーベル賞の国際政治学

――ノーベル文学賞と日本：日本人初の文学賞候補、賀川豊彦（1）――

吉 武 信 彦

International Politics of the Nobel Prize:
The Nobel Prize in Literature and Japan, Toyohiko Kagawa, the First Japanese Nominee (1)

Nobuhiko YOSHITAKE

要 旨

第二次世界大戦後、日本人でまずノーベル平和賞候補となったのは、牧師、社会事業家、作家の賀川豊彦である。賀川は1954年、55年、56年、60年と4回推薦されている。その賀川は平和賞に推薦される以前に文学賞にも1947年、48年に推薦されていた。誰がいかなる理由から賀川を推薦したのであろうか。本稿は、ノーベル文学賞を選考するスウェーデン・アカデミーの史料に基づき、その経緯を明らかにした。

1947年にはウプサラ大学教授のクヌート・B・ヴェストマンが、1948年には地理学者、探検家、スウェーデン・アカデミー会員のスヴェン・ヘディンがそれぞれ賀川を推薦していた。

これに対して、スウェーデン・アカデミーは両年とも賀川を受賞者として選出することはなかった。賀川は、候補が絞り込まれた段階で脱落していた。しかしながら、賀川について報告書が作成され、賀川の社会事業家としての活動を踏まえた旺盛な執筆活動が選考対象になったことがわかる。賀川の多彩な活動を示すエピソードとして捉えることができる。推薦したのが2名のスウェーデン人であり、またスウェーデン・アカデミーでの選考で有力候補とならなかったために、ノーベル文学賞候補としての賀川はスウェーデン・アカデミーの外に知られることは長くなかった。

キーワード：ノーベル文学賞、スウェーデン・アカデミー、賀川豊彦、クヌート・B・ヴェストマン、スヴェン・ヘディン

Summary

The first Japanese nominee for the Nobel Peace Prize after World War II was a Christian minister, welfare worker and author, Toyohiko Kagawa. He was nominated for the Nobel Peace Prize four times in 1954, 1955, 1956 and 1960. Before then, he was nominated also for the Nobel Literature Prize twice in 1947 and 1948. Who nominated Kagawa and why? This paper reveals the process based on the materials of the Swedish Academy which is responsible for selection of the Nobel Literature Prize.

He was nominated by Knut B. Westman, professor of Uppsala University in 1947 and by Seven Hedin, geographer, explorer and Swedish Academy member in 1948 respectively.

However, the Swedish Academy did not select Kagawa as the laureate in both years and he was dropped when the nominees were narrowed down. Nevertheless, it is true that the report on Kagawa was prepared and his positive writing endeavour based on the activities as welfare worker was subject to selection. His nomination is regarded as one of episodes showing his various activities. Since he was nominated by two Swedish and he was not a potential nominee at selection of the Swedish Academy, few people other than the Swedish Academy members knew for a long time the fact that he was the Nobel Literature Prize nominee.

Keywords: the Nobel Prize in Literature, the Swedish Academy, Toyohiko Kagawa, Knut B. Westman, Sven Hedin

はじめに

本稿は、第二次世界大戦後に牧師、社会事業家、作家の賀川豊彦がノーベル平和賞に加えて、ノーベル文学賞にも推薦されていたことをスウェーデン・アカデミーにある史料で明らかにしたものである。

賀川は、1954年、55年、56年、60年の４回ノーベル平和賞候補となっている[1)]。日本人候補としては、第二次世界大戦前の有賀長雄（国際法学者）、渋沢栄一（実業家）に次ぐ３人目の候補である[2)]。その賀川は、ノーベル平和賞候補に推薦される以前にノーベル文学賞にも推薦されていた。ノーベル平和賞に推薦されていたことは、推薦当時から断片的ではあれ一般にも知られていた。しかし、ノーベル文学賞への推薦については長い間全く知られていなかった。たとえば、賀川の死後、1964年に刊行された『賀川豊彦全集』第24巻の「賀川豊彦年表」にも、一切ノーベル文学賞についての言及はない[3)]。また、賀川と長年行動を共にした横山春一が1959年に出

した代表的伝記の増訂版『賀川豊彦傳』も、ノーベル文学賞については何も触れていない[4)]。このように、ノーベル文学賞への賀川の推薦は、賀川関係者にも一般の日本人にも全く知られていなかったのである。

これを初めて日本に紹介したのは、2009年９月の『毎日新聞』記事である[5)]。この記事は、スウェーデン・アカデミーが開示した史料により賀川推薦の情報を入手し、報道したものである。賀川が日本人として最初のノーベル文学賞候補であったことは、賀川関係者にも驚きをもって受け取られ、歓迎された。2009年は賀川が神戸新川で救貧活動を開始してから100年の記念すべき年であり、この賀川豊彦献身100年記念出版として多くの本が出版された。その中には、賀川の２度のノーベル文学賞推薦に早速言及したものもある[6)]。また、2010年10月に東京・世田谷文学館にて開催された賀川豊彦没後50年記念シンポジウムは、「賀川豊彦の文学～その作品の力～」と題し、文学における賀川の活動を検証しようと開催された。シンポジウム参加者の田辺健二（鳴門市賀川記念館館長）は、賀川のノーベル文学賞推薦について「昨年［2009年――筆者。以下同様］九月、賀川豊彦は日本人初のノーベル文学賞候補になっていたというニュースが流れました。これはご家族も知らなかったし、我々はもちろん知りませんでした。賀川豊彦のノーベル平和賞についてはすでに三回候補になっていたということはわかっておりましたけれども、文学賞の方にも候補になっていたのかと非常にびっくりしたというわけでございます。これはやはり『死線を越えて』を初めとするたくさんのベストセラーが欧米にも翻訳されて、欧米でも広く読まれたということをうけてのことだろうと思います」と発言している[7)]。

その後、ノーベル文学賞に対する日本人の関心は、1950年代末以降、谷崎潤一郎、西脇順三郎、川端康成が候補になっていたことに向いている[8)]。1960年以降は日本外務省も日本人初のノーベル文学賞受賞者を生み出すために動いていたことが判明しており[9)]、1968年に川端康成がノーベル文学賞を日本人として初めて受賞するまでの経緯に関心が集まっている。

しかし、1950年代末以降の日本人のノーベル文学賞推薦状況を考える上でも、1947年、48年の賀川の推薦をまず考察することは意味があろう。誰がいかなる理由で賀川を推薦したのであろうか。なぜ他の日本人よりも10年以上も早くノーベル文学賞に賀川は推薦されたのであろうか。また、スウェーデン・アカデミーでの選考過程において賀川はいかなる評価を受けたのであろうか。

本稿は、上記の疑問に対してスウェーデン・アカデミーの開示史料に基づいて明らかにすることを目的とする。ノーベル財団は、ノーベル文学賞についてもノーベル平和賞と同様に賞の選考過程を50年間、非公開にしている。現在では、賀川の推薦に関して史料が研究者に開示されているため、それをできる限り活用したい。なお、ノーベル財団のホームページにおいてノミネーション・データベースが運営され、各賞の過去の候補名、推薦者名が公開されている。しかし、文学賞については、他のノーベル賞よりも公開が遅れ、2013年５月現在、1901年から1950年までのデータが公開されているにすぎない[10)]。1947年、48年推薦の賀川についてはこのデータ

ベースにより推薦をめぐる基本的な事実関係はわかるものの、推薦内容の詳細はわからない。そのため、推薦状などの生の史料にあたる必要がある。

本稿では、まず第１章でノーベル賞推薦の背景として賀川豊彦と北欧との関係について簡単に振り返る。第２章ではノーベル文学賞の選考過程について紹介し、またノーベル文学賞受賞者の傾向について整理する。以上の前提を踏まえ、第３章で1947年の推薦について、第４章で1948年の推薦についてそれぞれ推薦者、推薦理由、スウェーデン・アカデミーの評価を考察したい。

1　賀川豊彦と北欧

（1）北欧訪問

賀川豊彦[11]は、日本国内で社会事業、伝道活動を行なうだけでなく、海外でも活発に伝道活動を行なった。その背景として、賀川本人がアメリカのプリンストン大学、プリンストン神学校で教育を受けたこともあり、海外での活動を苦としなかったこと、さらに神戸新川における救貧活動が世界的に知られ、高い評価を受けていたために、世界各地のキリスト教関係者から招聘されたことがある。特に一度海外に出ると、長期間、世界を回り、各地で大勢の聴衆を前に講演を行なう機会が多かった。ヨーロッパを訪問した際には、北欧諸国にも足を運んでいる。デンマークを２回（1925年、1950年）、フィンランドを１回（1936年）、ノルウェーを２回（1936年、1950年）、スウェーデンを２回（1936年、1950年）訪問している[12]。活躍した時代が異なるため、一概に比較できないが、『デンマルク國の話――信仰と樹木とを以て國を救ひし話――』（聖書研究社、1913年）を書き、北欧諸国を高く評価していた内村鑑三が生涯、一度も北欧諸国を訪問する機会がなかったこととは対照的である。以下では、ノーベル文学賞、平和賞との関連でスウェーデン、ノルウェーへの訪問を中心に簡単に賀川と北欧との関わりを紹介しておきたい。

1925年５月のデンマーク訪問で初めて北欧諸国に接した賀川は、北欧に対して好印象をもったと考えられる。賀川は積極的にデンマーク各地の国民高等学校を訪れ、その生活水準の高さに感銘を受け、さらに植民地経営に走るヨーロッパの大国とは異なり、デンマークが宗教を根底に国民生活の向上に傾倒してきたことを高く評価している[13]。

その11年後の1936年にも、賀川は訪米後、ヨーロッパを回り、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドを訪問している[14]。北欧訪問の主目的について、賀川は雑誌『雲の柱』に以下のように記している。「けふからヨーロッパを歩きます。私はノールウェイスヰ（ママ）デン、デンマークの諸国の協同組合を研究して、独逸に帰る予定です」、「オスロはノールウェイの首府です。人口三十五万、よき港です。ノールウェイ人は勇敢で、北極も南極もノールウェイ人が発見しました。こゝで日曜学校大会があつたので、七月七日から十二日まで居りました」とある[15]。このように、賀川は、北欧諸国の協同組合運動に関心をもち、視察するとともに、ノルウェーのオスロにおける万国日曜学校大会で講演するため、北欧を訪問したのである。

1936年７月、賀川はノルウェーでの日曜学校大会に参加し、3000人の聴衆に対して日曜学校と世界教化について講演を行なっている。その後、ノルウェー協同組合中央会、パン工場、人造バター工場、菓子工場、農村消費組合、酪農組合、小農指導者養成所などを精力的に回っている。ノルウェーの協同組合について、賀川は「もう少し協同組合が発達してゐると思つて予期した割合にノルウェーの組合が発達してゐないので、少し失望した。然し、之を日本の都市消費組合に比較すると驚く程、進歩してゐると云ふことが出来よう」と述べている[16)]。

ノルウェーに続いて、スウェーデンにおいても賀川は精力的に協同組合の工場を見て回っている。食品の工場について、賀川は、「この大工場に唯の二百五十人しか職工が居ないのに驚く。而も工場は米国ワシントンのホワイト・ハウスより美しい。唯驚異であつた。それより職工住宅を見る。室内装飾の美しいこと、教養の高いこと、家賃の高いこと、共に驚異である」と述べ、さらに電球工場については「その精巧なる機械、女工の美しいこと、設備の善いこと、組合万歳を三唱したかつた」との印象を記している[17)]。

このように、この時期、賀川は協同組合運動などの点から北欧諸国に関心を深めていた。それは、1938年に賀川らがM・W・チャイルズ（Marquis Childs）の『中庸を行くスヰーデン――世界の模範國――』を翻訳したことにもつながる。賀川は、この翻訳の序において、スウェーデン訪問で得た印象を交えて「世界に珍らしい道徳國」としてスウェーデンを紹介し、最後に「平和二百年、このスヰーデン國は地球の表面に於て最も理想に近い、社會的水準を我々に示してゐると考へざるを得ない。東洋平和の實現に努力してゐる日本は、大にスヰーデンに學ぶところがなくてはならぬ」と結論づけている[18)]。

第二次世界大戦下の北欧諸国について、賀川は1940年５月の『雲の柱』に「△松沢の桜も四月十三日の晩から降り出した雨にうたれて、哀れにも散りはじめた。しかし、雪よりも美しい、薄紅の花瓣が幾万となく街路に撒きちられてゐる光景には、眼の悪い私も胸を躍らさゞるを得なかった。△しかし桜の散る前に、デンマークが散りノールウエーが散りつつある、私は一九三六年夏北欧地方を旅行したために特別に、かうした平和な北欧の国々に対して拝意をもつてゐる。彼らのために私は真夜中に起きて新しく祈を捧げてゐる」と記している[19)]。1940年４月９日にドイツ軍のデンマーク、ノルウェー侵攻が開始され、両国が第二次世界大戦に直接巻き込まれたことに賀川は深い同情を寄せたのである。1936年の北欧旅行を思い出していることからも、北欧での体験が極めて印象深かったと考えられる。

第二次世界大戦後の1950年６月～７月、賀川はイギリス訪問の合間にデンマーク、スウェーデン、ノルウェーを再訪している[20)]。３国とも各地の教会関係者の歓待を受け、教会や公園で毎日のように精力的に講演を行なった。その規模は数十人程度から１万5000人にも及ぶものであった。訪問した町は、デンマークではコペンハーゲン、ハーニング、ヴィーボーなど、スウェーデンではイェンシェーピング、ストックホルム、ウプサラ、ボーロースなど、ノルウェーではオスロ、クリスチャンサンド、スタヴァンゲル、ベルゲン、トロンヘイムなどである。首都のみなら

ず、地方都市も多く含まれる。また、各地で学校、協同組合工場、病院、博物館、美術館、刑務所、農村なども精力的に視察している。ノルウェーのオスロではゲルハルセン首相（Einar Gerhardsen、労働党所属）にも面会している。

ノルウェー・ベルゲンでの講演の様子を賀川は以下のように記している。「午後七時より、ベルゲン中央公園にて話する。約一万五千人以上集まり、私は救世軍のトラックの上から会衆に話する。涙を流して聞いてくれたものが多数見受けられ、閉会後今日から『キリスト信者』になりたい、どうすれば善いか教へてくれと、貨物自動車の所まで泣き乍ら申出て来る人があつたことを私はミツシヨン幹部から聞いた」[21]。1950年のノルウェーにおける講演の様子は、写真にも記録されており、後に写真集に収録された[22]。

以上のように、賀川は1936年、1950年の訪問でノルウェー、スウェーデンの教会関係者、協同組合関係者らと交友し、両国でその存在感を遺憾なく発揮している。特に、キリスト教の盛んな地方にも精力的に足を運び、多くの一般聴衆にも接したことは、彼の知名度を高めたことであろう。また、協同組合に関心をもつ賀川自身にとっても、北欧諸国の協同組合の状況を直に見て回ることができ、大きな刺激になったと考えられる。

（2）著作の翻訳状況

上記のように、賀川は度々北欧を訪問し、精力的に北欧人に接してきたため、北欧人の間に賀川の名前は知られることになった。賀川への関心は、賀川の著作への関心となって表れた。ノーベル文学賞、ノーベル平和賞という観点から、スウェーデン、ノルウェー両国における彼の著作の翻訳状況を見てみよう。さらに、スウェーデン語、ノルウェー語との言語の近さから、デンマークにおける翻訳状況についても併せて見ておきたい。

まずスウェーデンにおいて表１の通り賀川の著作が多数翻訳されている。これは確認できた初版のみを対象としている。本によっては、版を重ねるものも出ており、一定の読者を獲得していたと考えられる。ノルウェー、デンマークに比べて、スウェーデンの翻訳点数の多さと早さには驚かされる。賀川の主要著作が網羅されており、1930年代に特に関心が高まったことがわかる。賀川がスウェーデンを初めて訪問したのが1936年であるが、それ以前から翻訳がなされている（表１のＳ－１～Ｓ－６の６件）。訪問後にも翻訳は続き、合計15件にもなる。賀川への関心が高かったことが伝わる翻訳状況である。また、スウェーデン王立図書館、スウェーデン・アカデミー図書館には、同時代の英語版の著作も入っており、翻訳が出る以前から英語でも賀川の著作は読まれていたと考えられる。特に、海外とのかかわりが強い教会関係者などの間では、賀川の著作がまず英語版で読まれた可能性が高い。英語版に関して言えば、スウェーデン語への翻訳はすべて英語版から重訳する形でなされている。出版社は、「スウェーデン・キリスト教学生運動出版社」など、キリスト教関係の出版社が多い。

次にノルウェーの状況であるが、表２のように翻訳点数は９件であり、スウェーデンほどでは

表１　賀川著作のスウェーデン語訳一覧

番号	スウェーデン語訳書名 （出版地・出版社）	出版年	翻訳者	翻訳元（原著）	出版年 （原著）	備考
S-1	*Innan dagen grydde: en berättelse* (Stockholm: Sveriges kristliga studentrörelses förlag)	1933	Teresia Eurén	*Before the Dawn* （『死線を越えて』）	1924 （1920）	スウェーデン・アカデミー図書館は英語版を所蔵。
S-2	*Solskytten: skildringar ur livet i slummen* (Stockholm: Sveriges kristliga studentrörelses förlag)	1934	Teresia Eurén	*A Shooter at the Sun* （『太陽を射るもの』）	1925 （1921）	
S-3	*Jesu religion* (Stockholm: Dagens bokförlag)	1934	Carl Rydhe	*The Religion of Jesus* （『イエスの宗教とその真理』）	1931 （1921）	
S-4	*Ett sädeskorn* (Stockholm: Fahlcrantz & Co.)	1934	Astrid Hallström	*A Grain of Wheat* （『一粒の麦』）	1933 （1931）	
S-5	*Vad väggarna viskat* (Stockholm: Sveriges kristliga studentrörelses förlag)	1935	Teresia Eurén	*Listening to the Walls* （『壁の声きく時』）	— （1924）	未公刊の英訳から。 スウェーデン・アカデミー図書館も所蔵。
S-6	*Kristus och Japan* (Stockholm: Svenska missionsförbundets förlag)	1935	Hilmer Ström	*Christ and Japan* （「日本とキリスト」『雲の柱』第13巻第3号～第6号）	1934 （1934）	
S-7	*Sånger från slummen* (Uppsala: J. A. Lindblads förlag)	1936	Jenny Holmåsen	*Songs from the Slums* （『涙の二等分』）	1935 （1919）	スウェーデン・アカデミー図書館も所蔵。
S-8	*Kärleken livets lag* (Stockholm: B. -M:s bokförlags A. -B.)	1936	August Strömstedt	*Love the Law of Life* （『愛の科学』）	1929 (1924)	
S-9	*Livets förnyelse* (Stockholm: Svenska missionsförbundets förlag)	1936	Hilmer Ström	*New Life through God* （『神による新生』）	1931 （1929）	
S-10	*Meditationer kring korset* (Uppsala: J. A. Lindblads förlag)	1936	Teresia Eurén	*Meditations on the Cross* （『十字架に就ての瞑想』）	1935 （1931）	
S-11	*Törntaggen i köttet: Guds budskap till dem som lida* (Stockholm: Sveriges kristliga studentrörelses förlag)	1937	Ingeborg Wikander	*The Thorn in the Flesh* （『残されたる刺』）	1936 （1926）	
S-12	*Landet som flyter av mjölk och honung* (Stockholm: Sveriges kristliga studentrörelses förlag)	1937	Hugo Hultenberg	*The Land of Milk and Honey* （『乳と蜜の流るゝ郷』）	1937 (1935)	スウェーデン・アカデミー図書館も所蔵。
S-13	*Broderskap och samhällsekonomi* (Stockholm: Sveriges kristliga studentrörelses förlag)	1938	Hugo Hultenberg	*Brotherhood Economics*	1936	原著は英語。
S-14	*En kristen i världen* (Stockholm: Sveriges kristliga studentrörelses förlag)	1938	Hugo Hultenberg	*The Practising Christian*	1937	原著不明。
S-15	*Se människan!* (Uppsala: J. A. Lindblads förlag)	1950	Elisabet Åkesson	*Behold the Man* （『小説キリスト』）	1941 （1938）	

出所：スウェーデン王立図書館の所蔵書（初版）に基づき筆者作成。Ｓ－６の原著については、財団法人雲柱社賀川豊彦記念松沢資料館学芸員の杉浦秀典氏にご教示頂いた。

表２　賀川著作のノルウェー語訳一覧

番号	ノルウェー語訳書名 （出版地・出版社）	出版年	翻訳者	翻訳元（原著）	出版年 （原著）	備考
N-1	*Jesu religion* (Oslo: Norsk litteraturselskaps forlag)	1935	A. Erstad	*The Religion of Jesus* （『イエスの宗教とその真理』）	1931 （1921）	
N-2	*Tanker om korset* (Oslo: Norsk litteraturselskaps forlag)	1936	Agnes E. Øie	*Meditations on the Cross* （『十字架に就ての瞑想』）	1935 （1931）	
N-3	*Kristus og Japan* (Oslo: Norsk litteraturselskaps forlag)	1936	A. Erstad	*Christ and Japan* （「日本とキリスト」『雲の柱』第13巻第3号～第6号）	1934 （1934）	
N-4	*En torn i kjødet: Guds budskap til dem som er i nød* (Oslo: Norsk litteraturselskaps forlag)	1937	Agnes E. Øie	*The Thorn in the Flesh* （『残されたる刺』）	1936 （1926）	
N-5	*Kristendom i praksis* (Oslo: Norsk litteraturselskaps forlag)	1938	Agnes E. Øie	*The Practising Christian*	1937	原著不明。
N-6	*Kjæligheten livets lov* (Oslo: Norsk litteraturselskaps forlag)	1939	Mary Rantrud	*Love the Law of Life* （『愛の科学』）	1929 (1924)	
N-7	*Et hvetekorn* (Oslo: De unges forlag)	1939	Frithjov Iversen	*A Grain of Wheat* （『一粒の麦』）	1933 (1931)	
N-8	*Se det menneske* (Oslo: Norsk litteraturselskaps forlag)	1949	Aage Hallsberg	*Behold the Man* （『小説キリスト』）	1941 （1938）	
N-9	*Brann i morgenrødens land* (Oslo: Norsk litteraturselskaps forlag)	1959	Ottar Raastad	*Listening to the Walls* （『壁の声きく時』）	— （1924）	未公刊の英訳から。

出所：ノルウェー国立図書館の所蔵書（初版）に基づき筆者作成。Ｎ－３の原著については、財団法人雲柱社賀川豊彦記念松沢資料館学芸員の杉浦秀典氏にご教示頂いた。

ない。また、出版時期はスウェーデンより若干遅れ、賀川のノルウェー訪問（1936年）以降に集中している。出版社は、スウェーデンと同様、キリスト教関係の文献を多数出版している数社に集中している。ノルウェー国内の図書館には、同時代のスウェーデン語版、英語版の賀川著作も所蔵されており、ノルウェー語版に加えてそれらも読まれた可能性が高い。

ノルウェーとスウェーデンとの間の顕著な違いとしては、スウェーデンでは賀川の自伝的小説『死線を越えて』、『太陽を射るもの』、『壁の声きく時』の３部作のほか、詩集『涙の二等分』などの文学作品がまず集中的に翻訳され、宗教関係書が続いたのに対して、ノルウェーでは宗教関係書が主に訳され（すべてスウェーデンでも翻訳されている）、文学作品はその後に一部が翻訳されたにすぎない点がある（表２のN- ７～N- ９の３件）。以上の翻訳状況から、スウェーデンでは宗教家であるとともに、作家としての面も含めて賀川を総合的に捉えることができるのに対して、ノルウェーでは賀川の宗教家としての面がより強く出ているといえよう。賀川の著作に対する重点の違いは、両国における賀川本人に対する理解にも影響を与えたと考えられる。

なお、スウェーデンとノルウェーの翻訳点数をめぐる差については、国内市場の規模も影響しているのかもしれない。1930年の人口でいえば、スウェーデンが614万人、ノルウェーが280万人であり[23)]、倍以上の人口の違いがあった。スウェーデンは国内市場が大きい分、多数の翻訳が可能になったのかもしれない。

以上のスウェーデン、ノルウェーに対して、デンマークでは表３の通り２点の翻訳しか確認されなかった。スウェーデン、ノルウェーに比べると、賀川への注目度は低いといわざるを得ない。ただし、『死線を越えて』が英語版出版直後の1925年に翻訳され、出版という観点で北欧諸国の中で最も早期に賀川に目が向けられた点は特筆に値する。また、デンマークの図書館には同時代に出版された賀川の著作のスウェーデン語版、ノルウェー語版、英語版が所蔵されており、賀川への関心がなかったわけでないと考えられる。

以上の翻訳状況は、賀川自身の著作の翻訳を対象にしていた。しかし、それ以外にもスウェーデン、ノルウェー、デンマークにおいて第３者による賀川紹介の本が1920年代以降、各国語で刊行されていた点も無視することはできない[24)]。こうした紹介を通じて賀川の思想と活動は北欧の一般国民の間に浸透していた可能性が高いのである。

表３　賀川著作のデンマーク語訳一覧

番号	デンマーク語訳書名（出版地・出版社）	出版年	翻訳者	翻訳元（原著）	出版年（原著）	備考
D-1	*Over dødens grænse* (København: O. Lohse forlag)	1925	F. Friis Berg	*Before the Dawn*（『死線を越えて』）	1924（1920）	
D-2	*Et hvedekorn* (Købehnhavn: Frederik E. Pedersens forlag)	1934	名前無	*A Grain of Wheat*（『一粒の麦』）	1933 (1931)	

出所：　デンマーク王立図書館の所蔵書（初版）に基づき筆者作成。

2　ノーベル文学賞

（1）選考過程

ノーベル文学賞について考察するため、簡単に同賞について整理しておきたい。ノーベル賞創設者のノーベル（Alfred Bernhard Nobel）は、1895年の遺言状においてノーベル賞の元になる提案を行なっている。それによれば、遺族分を除いた資産を処分してつくった基金の利子は毎年、物理学、化学、生理学・医学、文学、平和の各賞に分配されるが、文学賞については「文学で理想主義的な傾向の最もすぐれた作品を創作した人物」に与えられることになっていた。また、遺言状では「文学賞はストックホルムのアカデミー」によって授与されるとされていた。また、ノーベルは「賞の授与にあたっては、候補者の国籍はいっさい考慮されてはならず、スカンディナヴィア人であろうとなかろうと、最もふさわしい人物が受賞しなくてはならないというのが、私の明確な意志である」と述べ、すべての分野で世界中の人に開かれた賞を構想していた[25)]。

この遺言状の文言は、1900年に設立されたノーベル財団によって最大限活かされ、実際のノーベル賞に反映された。ただし、文学賞については選考母体とされていた「ストックホルムのアカデミー」は「スウェーデン・アカデミー (Svenska Akademien)」として処理され、同アカデミーが選考を担うことになった。スウェーデン・アカデミーは、スウェーデンにおける言語学、文学の研究を奨励する学界最高機関である。1786年に国王グスタフ３世（Gustav III）によってフランスのアカデミー・フランセーズ（学士院）をモデルとして創設された。正会員の18名（終身）は、文学者、作家などの言語学、文学の最高権威によって構成されている。現在、首都ストックホルム中心部にある旧市街におかれている。

ノーベル文学賞の選考過程は、以下の通りである[26)]。スウェーデン・アカデミーは、前年の９月にノーベル文学賞推薦の依頼状を世界中の関係者に発送する。推薦状の締め切りは、翌年２月１日である。選考の中心的な作業は、アカデミー内のノーベル委員会によって進められる。ノーベル委員会は、スウェーデン・アカデミーの会員４～５名（互選、３年交替）から成る組織である。まずノーベル委員会は推薦者の資格を審査し、２月初旬に有資格者の推薦した全候補リストをアカデミー例会（毎週木曜日開催）に示し、承認を得る。その後、ノーベル委員会が候補を絞り込んでいく。各委員は推薦された候補について文学的価値などを詳細に調査する。候補の著作を検討する際、欧米以外の言語の場合にはスウェーデン語への試訳、分析評価を専門家に依頼することもある。委員会は、４月に候補を15名～ 20名程に絞った仮リストをアカデミー例会に提案し、承認を受けたうえで、さらに候補の絞り込み作業を継続する。最終的に、委員会は５月末に有力候補約５名の最終リストをまとめ、アカデミー例会に提示する。その後、夏休みが終わるまでに、アカデミー会員はそのリストに載った候補の作品を読み進め、ノーベル委員会委員は秋のアカデミー例会用に各候補に関する報告書を準備する。夏休み明けの９月中旬以降、アカデミー

例会で候補についての議論が行なわれ、最終的に10月初旬、中旬のアカデミー例会で受賞者が決定される。決定には、アカデミー会員による投票で、投票総数の過半数以上の得票が必要である。決定後、スウェーデン・アカデミーから受賞者が発表される。授賞式は、平和賞以外の他のノーベル賞と同様にノーベルの命日である12月10日にストックホルム市内で開催される。

ノーベル文学賞の現在の推薦資格は以下の通りである[27)]。

・スウェーデン・アカデミー会員およびスウェーデン・アカデミーと同種の会員、目的を有する各国アカデミー、機関、団体の会員
・各国の文学、言語学の大学教授
・ノーベル文学賞の歴代受賞者
・各国の文学活動を代表する作家協会の会長

なお、自薦は認められていない。また、1949年のノーベル財団規約の改正以前は、「ノーベル文学賞の歴代受賞者」、「各国の文学活動を代表する作家協会の会長」は明記されていなかった[28)]。

（2）ノーベル文学賞受賞者の傾向

1901年に始まったノーベル文学賞は、1914年、18年、35年、40年、41年、42年、43年を除き、毎年、着実に受賞者を出してきた[29)]。受賞者を出せなかった年は、第一次世界大戦、第二次世界大戦の影響を受けた年がほとんどである。2012年現在、109名の文学賞受賞者がいる（受賞を辞退した1958年のパステルナーク［Boris Leonidovich Pasternak］、1964年のサルトル［Jean-Paul Sartre］も含む）。1904年、17年、66年、74年は２名の受賞者がいるが、それ以外は１名の受賞者である。その他の分野のノーベル賞では一度に複数（最大３名）の受賞者がいることが多いが、それとは対照的な傾向である。109名の受賞者のうち、女性は12名である。女性初の受賞は1909年のスウェーデンのラーゲルレーフ（Selma Lagerlöf）であり、早い段階で受賞者が出ている。しかしながら、1990年までが６名、1991年以降が６名という事実を考えると、近年になって女性受賞者が急増していると言えよう。

歴代受賞者の全体的な傾向は、表４のノーベル文学賞受賞者の言語別人数を見ると明確である。賞創設以来、受賞者は欧米諸国の作家、詩人らが多い。賞を選考するのがスウェーデン人ということから、北欧諸国の言語は別として、欧米諸国の言語において英語、フランス語、ドイツ語を利用する受賞者が多い[30)]。しかし、徐々にそれら以外の欧米言語の受賞者も増える傾向にある。

非欧米諸国の受賞者が多くなるのは、1960年代以降である。1966年のアグノン（Shamuel Yosef Agnon、イスラエル）、1968年の川端康成の受賞は画期的な出来事であった。それぞれヘブライ語、日本語という非欧米諸国の言語で創作活動を行なった受賞者も出てきたのである。ノーベル文学賞において、それまで非欧米諸国の作家は不利な立場におかれてきたことは否めない。それは、文学賞の対象である文学という分野の性格によるところが大きい。すなわち、スウェー

表４　ノーベル文学賞受賞者の言語別人数

言語名	1900年代	1910年代	1920年代	1930年代	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	計（2012年）
英語	1		2	4	2	3	1	2	3	4	4		26
フランス語	1	2	2	1	1	2	3		1		1		14
ドイツ語	2	3	1		1		1	1		1	2		12
スペイン語	1		1		1	1	1	2	2	1		1	11
スウェーデン語	1	1		1		1		2				1	7
イタリア語	1		1	1		1		1		1			6
ロシア語				1		1	1	1	1				5
ポーランド語	1		1						1	1			4
ノルウェー語	1		2										3
デンマーク語		2			1								3
ギリシャ語							1	1					2
日本語							1			1			2
中国語											1	1	2
オクシタン語	1												1
ベンガル語		1											1
フィンランド語				1									1
アイスランド語						1							1
セルボ・クロアチア語							1						1
ヘブライ語							1						1
イディッシュ語								1					1
チェコ語									1				1
アラビア語									1				1
ポルトガル語										1			1
ハンガリー語											1		1
トルコ語											1		1
計	10	9	10	9	6	10	11	11	10	10	10	3	109

註：言語名は、2012年時点の受賞者人数の多い順に並べた。同数の場合は、受賞年が早い順に並べた。
1913年のタゴールはベンガル語と英語、1969年のベケットはフランス語と英語、1987年のブロツキーはロシア語と英語で執筆したが、それぞれベンガル語、フランス語、ロシア語で便宜上分類している。
受賞を辞退した1958年のパステルナーク、1964年のサルトルも含む。
出所：2012年については、ノーベル財団ホームページ＜http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/shortfacts.html＞に基づくが、フランス語とドイツ語については人数を修正した。それ以外の年代については、筆者が集計、作成した。

デン・アカデミーの会員が選考を行なうに際して、欧米諸国の言語で書かれた文学作品は言語的に問題なく読むことができ、さらにその文化的背景も理解しやすいものである。それに対して、非欧米諸国の文学作品については言語の壁、文化の壁が存在した。しかし、第二次世界大戦後、非欧米諸国の作品が欧米の言語に徐々に翻訳されるようになり、そうした翻訳の蓄積の上に非欧米諸国の文学作品もノーベル文学賞の選考対象となっていったのである。

無論、歴代受賞者の中にインドのタゴール（Rabindranath Tagore）を見出すことができる。彼は、1913年にノーベル文学賞を受賞している。例外的に早い時期の受賞であるが、これはイギリス植民地下のインドにおいて英語が使われ、タゴール自身、在英経験もあり、母語のベンガル語以外に英語でも創作活動を行なった。そのため、タゴールは例外的に早期の受賞となったのである。

現在では、スウェーデン・アカデミーはノーベル文学賞のグローバル化を推進し、世界中の様々な言語の文学作品にも意識的に目を配り、非欧米諸国の受賞者を積極的に出すようになっている。中国語、イディッシュ語、アラビア語、トルコ語で著作活動を行なう受賞者も出ている。また、受賞者の国籍も欧米だけではなく、現在ではアジア、アフリカ、中東、中南米、オーストラリア

などにも広がり、ノーベル文学賞は名実ともに世界の文学賞として変化しているのである。

（よしたけ　のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授）

註

1）拙稿「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦後の日本人候補、賀川豊彦――」（1）、（2・完）（『地域政策研究』第15巻第2号、2013年1月。第15巻第4号、2013年3月）。ノーベル財団の平和賞ノミネーション・データベースも参照。<http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/nomination/database.html>、2013年5月4日アクセス。

2）拙稿「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦前の日本人候補――」（『地域政策研究』第13巻第2・3合併号、2010年11月）。

3）賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集』第24巻（キリスト新聞社、1964年）、576～624頁。

4）横山春一『賀川豊彦傳（増訂版）』（警醒社、1959年）。

5）「賀川豊彦　ノーベル文学賞候補だった」（『毎日新聞』2009年9月13日朝刊）。この記事を追う形で『読売新聞』、『朝日新聞』も報道している。「賀川豊彦　ノーベル文学賞候補に2回」（『読売新聞』2009年9月14日朝刊）。「社会運動家・賀川豊彦　ノーベル文学賞候補だった」（『朝日新聞』2009年9月14日夕刊）。

6）武内勝口述、村山盛嗣編『賀川豊彦とボランティア〔新版〕』（神戸新聞総合出版センター、2009年）、354～355頁。賀川豊彦献身100年記念事業実行委員会編『Think Kagawa　ともに生きる――賀川豊彦献身100年記念事業の軌跡――』（賀川豊彦記念・松沢資料館発行、家の光協会発売、2010年）、127、223頁。

7）「シンポジウム『賀川豊彦の文学～その作品の力～』」（『雲の柱』第25号、2011年3月）、68頁。なお、ノーベル平和賞について賀川は3回ではなく、4回推薦されたことが現在では判明している。

8）「谷崎　ノーベル賞候補4度」（『読売新聞』2013年1月14日朝刊）。待田晋哉「1960年の谷崎」（1）～（7）（『読売新聞』2013年6月3日、4日、5日、6日、11日、12日、13日朝刊）。

9）拙稿「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：序説――」（『地域政策研究』第12巻第4号、2010年3月）、30～32頁。

10）ノーベル財団の文学賞ノミネーション・データベース<http://nobelprize.org/nobel_prizes/literature/nomination/database.html>、2013年5月4日アクセス。

11）賀川の生涯については、以下を参照。前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦後の日本人候補、賀川豊彦――」（1）、20～21頁。

12）アイスランドについては、1950年7月、賀川がロンドンからニューヨークに向かう途中、飛行機が夜中に立ち寄ったのみである（「欧米日記」、前掲『賀川豊彦全集』第24巻、347頁）。

13）拙著『日本人は北欧から何を学んだか――日本－北欧政治関係史入門――』（新評論、2003年）、44～45頁。賀川豊彦『雲水遍路』（賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集』第23巻、キリスト新聞社、1963年）、124～132頁。原本は、1926年に改造社から出版された。

14）賀川豊彦『世界を私の家として』（前掲『賀川豊彦全集』第23巻）、436～438、446～449頁。原本は、1938年に第一書房から出版された。

15）「身辺雑記」、前掲『賀川豊彦全集』第24巻、215頁。

16）賀川豊彦『世界を私の家として』（前掲『賀川豊彦全集』第23巻）、446頁。なお、賀川は、同じ頁でノルウェーが「軍備を撤廃して」、「常備軍は楽隊だけである」と指摘しているが、これは事実に反する。1933年防衛法により、軍の大規模な縮小が断行されたが、撤廃ではなかった。

17）同上、438頁。

18）M・W・チヤイルヅ『中庸を行くスキーデン――世界の模範國――』賀川豊彦、島田啓一郎訳（豊文書院、1938年）、訳者序2、5頁（Marquis Childs, *Sweden: The Middle Way*［New Haven, Conn.: Yale University Press, 1936］）。

19）「身辺雑記」、前掲『賀川豊彦全集　第24巻』、305頁。

20）同上、339～341、345～347頁。

21）同上、346頁。

22）賀川豊彦写真集刊行会編『賀川豊彦写真集』（東京堂出版、1988年）、61頁。

23）*Nordic Statistical Yearbook, 2007* (Copenhagen: Nordic Council of Ministers, 2007), p.60, table 13. なお、デンマーク本土の1930年の人口は353万人であった。

24）たとえば、以下の賀川紹介本がある。デンマーク：　J. M. T. Winther, *Kagawa, de forkuedes ven: et rids af hans livs virke og tanker* (København: Lohse, 1925). スウェーデン：　アメリカで出されたアクスリングの賀川紹介本（William Axling, *Kagawa* [New York : Harper and Brothers, 1932]）が1933年にスウェーデン語訳となっている。William Axling, *Kagawa*, övers. från engelskan av Augustinus Keijer (Stockholm : Svenska missionsförbundets förlag, 1933).また、以下の紹介もある。Jenny Holmåsen, *Toyohiko Kagawa: tjänaren, ledaren, bedjaren* (Uppsala: J. A. Lindblad, 1935). ノルウェー：　アクスリングの賀川紹介本（1932年）は1934年にノルウェー語訳にもなっている。William Axling, *Kagawa*, fra engelsk ved

Josef Nordenhaug (Oslo: Norsk litteraturselskaps forlag, 1934). また、スウェーデンで刊行されたホルムオーセンの著作が1936年にノルウェー語訳となっている。Jenny Holmåsen, *Kagawa*, på norsk ved Stephen Tschudi (Oslo : Lutherstiftelsen, 1936).

25）ノーベルの遺言とノーベル賞の創設については、以下を参照。拙稿「ノーベル賞の国際政治学――ノーベル平和賞の歴史的発展と選考過程――」(『地域政策研究』第13巻第４号、2011年２月)、25 ～ 29、39 ～ 40頁。

26）スウェーデン・アカデミーのホームページ（＜http://www.svenskaakademien.se/en/the_nobel_prize_in_literature/nobel_prize_in_literature.html＞、2013年５月４日アクセス)。

27）同上ホームページ。

28）同上ホームページ。

29）ノーベル文学賞の各受賞者については、以下を参照されたい。ノーベル財団ホームページ＜http://nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/index.html＞、2013年５月４日アクセス。邦語では、柏倉康夫『ノーベル文学賞――「文芸共和国」をめざして――』(吉田書店、2012年)。同書は柏倉康夫『ノーベル文学賞――作家とその時代――』(丸善ライブラリー、1992年）を改訂したものである。

30）ノーベル文学賞受賞者の言語別人数について、本稿の表４とノーベル財団ホームページに存在する表（Facts on the Nobel Prize in Literature, ＜http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/shortfacts.html＞）との間で、フランス語人数とドイツ語人数に差が出ている。表４がフランス語14名、ドイツ語12名であるのに対して、ノーベル財団の表ではフランス語13名､ドイツ語13名となっている (内訳の詳細は記されていない)。筆者の考える内訳は以下の通りである。

フランス語：1901年プリュドム、1911年マーテルランク、1915年ロマン・ロラン、1921年アナトール・フランス、1927年ベルクソン、1937年マルタン・デュ・ガール、1947年ジッド、1952年モーリヤック、1957年カミュ、1960年サン＝ジョン・ペルス、1964年サルトル、1969年ベケット、1985年シモン、2008年ル・クレジオ。

ドイツ語：1902年モムゼン、1908年オイケン、1910年ハイゼ、1912年ハウプトマン、1919年シュピッテラー、1929年トーマス・マン、1946年ヘルマン・ヘッセ、1966年ザックス、1972年ベル、1999年ギュンター・グラス、2004年イェリネク、2009年ミュラー。